

星一と後藤新平の親交とその運命

三澤 美和¹(¹星薬大・薬理)

星薬科大学および星製薬株式会社創立者である星一は、明治・大正・昭和の 77 年間、波乱万丈の生涯をおくったが、親交関係をみると異色の大人物が多い。後藤新平もその一人であった。後藤は星より 15 歳年長であったが、後藤の亡くなる迄 27 年間交際を重ねた。星が米国留学中に雑誌発行を続けていたが、その金策のため明治 35 年に一時帰国した。その時在野政治家杉山茂丸に紹介してもらった後藤から大金を出資してもらったのが縁である。その直後台湾民政長官であった後藤に同行し、1 カ月ほど仕事を手伝った。明治 39 年後藤のアメリカ視察旅行の時は、3 カ月間つきっきりで案内した。後藤は貴族院議員、満鉄初代総裁、逓信大臣、鉄道院初代総裁、副総理、内務大臣、外務大臣、東京市長、伯爵、東京放送局 (NHK の前身) 初代総裁、ボーイ・スカウト総裁など政官界の要職を歴任し、有力な首相候補にもなった。「大風呂敷の後藤」と揶揄されたように、時代の先を読む抜群の構想力・実行力をもった稀代の政治的事業家であり、明治・大正期に現在につながる数々の大事業を達成した。星も性格がこの点類似しており、後藤を大いに尊敬し感化もされた。第一次世界大戦時のこと、ドイツからモルヒネの供給が途絶えたとき、星は独占事業として台湾から阿片を原料としてモルヒネの国産化と大量製造・輸出に成功するに到った。これも台湾における後藤の口添えと力が大きくあずかっていた。大正 8 年、欧州視察から帰った後藤から星は、「日本が医学を学んだドイツの医学界は大戦による財政的な破綻で困窮している」と聞いた。星は 200 万マルクの大金をドイツ医学界に寄付した。その返礼として星製薬商業学校大講堂の竣工式にドイツ大統領特使としてハーバー博士が後藤とともに臨席した。その後後藤は星製薬に何度も講演に来た。大正 13 年、政敵内閣の発足により後藤が失脚すると、星の事業つぶしも始められた。そんな深刻な時期にも気の合う二人は毎日のように後藤宅で愉快そうに話し合っていた。